岐阜県方言における動詞の活用について

On verbal conjugations of Gifu dialects

山　田　敏　弘
YAMADA Toshihiro
lingua@gifu-u.ac.jp

1．はじめに

日本語の動詞は，大きく五段動詞と一段動詞に分かれる。五段動詞は，「書かない」「書きます」「書く」「書けば」「書こう」のように，活用語尾が（この場合カ行の）五段に活用する（言い換えれば各行の子音までが不変部分となる）ものであり，一段動詞は，「食べない」「食べます」「食べる」「食べれば」「食べよう」のように，活用語尾がイ段もしくはエ段の同じ母音を介する（ふつうに考えればこの母音までが語幹である）動詞である。サ変動詞，カ変動詞も，活用の分類からすれば一段動詞により近い。

五段か一段かは，動詞によって個別に決まっているが，「任す」と「任せる」のように，共通語としても一部に両型に活用する動詞もあり，特に東西方言の接点である岐阜県では，一段型と五段型が入り交じる様相も見られる。また，活用型が交替する現象として，一段動詞がラ行五段動詞化する現象も，特に東濃方言に見られ喜多川 (1976) ほかで報告がある。サ変動詞について言えば，全国的に知られる一段動詞化の現象と軌を一にするように，終止形の「する」が「セル」および「シル」となるなどの現象が県内に見られる。

このような，動詞の活用型に関する方言形式については，それぞれの現象についてさまざまなレベルで報告がなされているが，詳細な報告が少ないものもあり，また，域内の活用に関する諸現象を統一的に記述していく必要性もある。

本考察では，上記の活用型に関する岐阜県方言の諸現象を，臨地調査の結果と各地方言資料で報告されている記述とを合わせ考察し，活用とは何かを岐阜県方言を通じて考えてみたい。もちろん，もっとも古い資料からもっとも新しい資料まで一世紀近い年代差があり，これをもって厳密な分布を表わそうとは考えていない。あくまでおおまかな分布を見る参考とする。なお，方言資料については，略して本文中では用い，詳細については参考文献と併せ最後に挙げる。

2．岐阜県方言における五段動詞と一段動詞の交替について

「足る」と「足りる」のどちらが正しいか。共通語としては「足りる」のほうがなじんでいるとはいえ，「足る」がまったく許容されないかというとそうではない。同様に，「任す」「任せる」は，どちらも辞書に載る形である。

このような五段型・一段型両方に活用する動詞については，方言差があることが知られている。国立国語研究所 (1991) では，「飽きる」「足りる」「任せる」について，一段動詞型は長野県以東の東日本に多く，五段動詞型は関西地方以西の西日本に多いことを報告している。

岐阜県について見てみると，国立国語研究所 (1991) には五段動詞型と一段動詞型が混在する様子が描かれている。同63図では，「足る」と「足りる」に関し，各務原市須衛，美山町（現山県市美山）谷合，揖斐川町七間町の 3 地点で「足る」が用いられるが，概して「足りる」が用いられると報告されている。同65図「任せる」では，県内全域で「任せる」という一段動詞が用いられているとされる。

しかし，県内各地の方言集からは，複雑な分布の様相が読み取れる。
まず，五段動詞と一段動詞が併用される動詞の記述がある。

・たりる　(動)　上一　五段の「足る」と両用　[関ヶ原町史：138]
・うしなう（うしなえる　うしならかす）　なくす　紛失する　[関ヶ原町史：128]
・タバウ・タバエル　蓄える。　[大垣：165]

実際，国立国語研究所 (1991) 第65図の「任せる」についても，今回，国立国語研究所共同プロジェクトで調査した県内10地点[1]（2011年12月現在）のうち，恵那市明智町，中津川市福岡町，瑞浪市土岐町，美濃加茂市下米田，岐阜市岩崎，揖斐郡池田町，不破郡垂井町[2]で，「任す」「任せる」両方使うとの報告があり，どちらか一方しか使わないという回答は，一段動詞「マカセル」のみが報告された高山市旧町部，海津市海津町と，「マカェータ」と五段動詞イ音便形のみが回答された揖斐川町[3]のみである。岐阜県内では，五段型・一段型が併用されている地域が，少なくとも終止形に関する限り，広く見られるということである。
一方，五段型を方言形として捉えている記述としては，次のようなものがある。

・たらん　足りない　[笠松町史：544]
・たらん　足りない　[川島町史：1301]
・カル　借りる。(廃)　[大垣：96]
・ひどい目にあわしたるぞ　やつつけるぞ　[大垣市史：1044]
・お腹がこはる　お腹がいたむ　[大垣市史：1045]
・こわる　腹がこわる　腹が痛い　[根尾村史：787]
・おつた　落ちた　[平田町史：1195]

このほかにも，五段動詞型に活用していても，それが方言であるとの意識がないものがある可能性を否定できない。なお，都竹 (1941) にも，飛騨萩原方言に関し「オっタ」の記述が見られる。

逆に一段動詞が方言形として挙げられたものには，次のようなものがあった。

・あきる　飽く　[大垣市史：1045]

「あきる」に関しては，昭和５年発行ということもあってか，現在共通語で一般的になっている一段型が方言形となっていることが興味深い。
一方，次のような例は，共通語には存在しない一段動詞を記述したものである。

・しまえた　終わった　[各務原市史：473]
・もりる　もる (漏る)　[厚見郷土史：311]
・もりる　もる (漏る)　[笠松町史：556]
・もりる　水などが漏る　上一段に活用する　[関ヶ原町史：146]

1 調査対象者は，いずれも70代以上のはえぬき話者である。皆，学校等で数年間の外住歴はあるものの基本的に居中値を離れたことはない。
2 ただし，垂井町では「任せる」のほうがふつうとのこと。
3 終止形については，回答が得られなかった。

- もりる　漏る　[大垣市史：1044]
- もりる　漏る（もる）　[赤坂町史：538]
- もりる　漏る　[南濃町史：1217]
- かせる　動　①貸す。②（瘡面などが）乾く。　[飛騨のことば：216]
- 貸す　1カセル　オンシニ　コノ　ホン　カセルデ　ナニカ　オレノ　ミトラン　ヤツ　カシテ　[中津：23]
- かちる　勝つ　[東濃：10]
- たせる　動　たす。足。加。　[集成大野郡：297]
- とちれる　ものぐるほし　[平田町史：1210]
- とちれる　とちる　[南濃町史：1212]
- とちれる　とちる　[養老町史：840]
- とちれる　とぼけ　[輪之内町史：747]

共通語には「しまう」はあるが，可能の意味以外で「しまえる」はない。また，同じ一段でも共通語では「漏れる」であり「*漏りる」ではない。「貸セル」は，「貸す」の意味であって「貸すことができる」の意味ではない。同様に「足セル」も「足す」の意味である。「勝チル」という形は共通語にない。

このように収集された語形をどのように捉えたらよいのか。地域的に「漏リル」は岐阜市周辺から西濃地方にかけて分布し，「貸セル」は飛騨や東濃に報告されているなど，地域的に離れている。つまり，どのような地域で一段化する傾向があるとは，少なくともこの用例からは言えない。ましてや，「書く」が「*書きる」（「*」は文法的に想像された架空の形式を表す）になるような，一段化の強い傾向は当地方に見られない。むしろ，語によって個別に，共通語と異なる五段動詞が用いられたり一段動詞が用いられたりすることがあると言えるだけである。

さらに，このような五段・一段の対応が，動詞ごとに異なっているだけでなく，動詞の活用形内部で体系のいびつさも見逃せない。終止形では，一段型の「足りる」が優勢と述べたが，76図の「足りない」に当たる形では，旧中津川市内の一地点で「足りん」が用いられるほかは全県域で五段動詞型の「足らん」（一地点のみ「足らない」）が用いられている。終止形が県内全域で一段型である「任せる」については，より広く県内全域で（さらには長野県から新潟県にかけて）五段動詞型「任した」およびそのサ行イ音便形「任いた」と一段動詞型「任せた」が，併用されているか，あるいはまだらに分布している状況となっている（「任した」と「任せた」が単なる前舌母音の交替という音韻的現象でないことは，サ行イ音便の存在が証明している）。つまり，活用が体系としてまとまっているというよりは，語形ごとに個別に選択され，それらが集まって「活用」を構築しているにすぎないということである。このことは，「活用」とは何かという本質的な問題を提起する。

一方，連用形の「て」や「た」に続く形に，五段型の活用の一部と考えられるものが混在することもある。

- みして　見せて。見せてくれ。　[飛騨の方言：355]
- みして〔句〕見せて。「その本を見して。」　[多治見：104]
- ノシテ　のせて，戴，乗　[上石津町史：115]
- のして（車に-）　のせて（載せて）　[平田町史：1212]
- のして　(車に—)　のせて(載せて)　[本巣町史：1312]
- のして　乗せて　[真正町史：1040]

・のして　　のせて (乗せて)　　[赤坂町史：536]

それぞれ「*見す」「*乗す・*載す」という五段型は存在しない。なお，「見シテ」が西濃にないかというとそうではなく臨地調査ではより広範囲に確認されている。岐阜市では「見シテ/見シタル/見シタ」「乗シテ/乗シタル/乗シタ」なども使われる。ほかに，「失(う)せる」「寄せる」が（同様に，「*失(う)す」「*寄す」が用いられないにもかかわらず）「失(ウ)シテ…」「寄シテ…」になる[4]。

では，このような語形はどのようにして生じたものであろうか。これを単なる前舌母音の交替という音韻的現象と考えられるかという点については，否定的である。上で述べたサ行イ音便化が見られるほか，「*見シナイ」「*見シレバ」は存在せず，「見シ-」という語形は連用形に限定されているからである。連用形とは五段動詞でイ段になる活用形である。当然，「任せる」「書かせる」という五段型と同時に「任す」「書かす」という一段型が用いられることが関係していることは推察される。一方，「痩せる」「褪せる」「浴びせる」などが「*痩シテ」「*褪シテ」「*浴ビシテ」になることはない。ここから，岐阜県西部においては，若干の五段動詞的性質が一段動詞に及んでいると言えるのではないだろうか。これは，一段動詞型活用という体系のほころび程度のレベルなのであろう。

３．一段動詞のラ行五段動詞化

前節では，活用が活用形ごとに任意に選択された形式の集合でしかないと考えられる現象を見たが，本節では，より多くの語について体系として特定の地域で活用型が交替する現象である，東濃地方のラ行五段化現象を見る。

このような，共通語では一段動詞が用いられる動詞がラ行五段動詞型活用をする現象は，日本各所で見られる。国立国語研究所（1991）には，74図に「見ない」，79図に「寝ない」などが挙げられているが，おおよそ，長野県南西部〜岐阜県東南部〜愛知県三河地方，奈良県南部および近隣地域，淡路島，山陰地方，九州全域および琉球諸島（「寝ない」について琉球諸島では「眠る」系の語を用いる）に分布が見られる。岐阜県内では，付知町(現 中津川市付知町)六区桜町で「見ラン」が報告されているが，同地で「寝ラン」は回答されておらず，また，73図の「飽きない」を「飽キラン」と五段動詞化する現象は，岐阜県内には見られない。つまり，ラ行五段化現象について，岐阜県東濃地方は，少数の語にのみ限定的に見られる周辺的地域と位置づけられる。

しかし，岐阜県内の方言集からは，次のように，旧恵那郡域（現在の恵那市・中津川市）を中心に，ラ行五段化した形式が報告されている。活用形ごとに形式を挙げる。

[未然形]

・見んこな・見らんこな　　見なさい・御覧なさい　　[大井：24]
・みらん　　見ない（下呂町上原）　　[飛騨の方言：359]
・みらんしょ　句　見なさい。四段活用　　[集成恵那郡：275]
・みらんしょ　〔句〕　みなさい。ぎあ，この手紙を，みらんしょ。」　　[多治見：104]
・ねらん　句　ねない。寝。　　[集成恵那郡：270]
・みらずに　句　見ずに。　　[集成恵那郡：275]
・みらずに　〔句〕　みましょう。「あした，芝居を，みらずに。」　　[多治見：104]
・見らまいか　見よう・見ませう　　[大井：24]
・みろまい　(句)　見ましょう「見らまいか」　　[岩村町史：572]
・みらっしゃい　句　　見なさい　「見る」の五段活用　　[集成大野郡:301]

4 都竹（1941）にも，飛騨地方旧益田郡において「載シタ・寄シタ」使った旨報告がある。

[連用形]

- みります　句　見ます。「見る」の四段活用。　[集成恵那郡：275]
- みりたか　みなさったか 恵ナ○　[釜戸：21]
- きりました　句　着ました。「着る」の四段活用　[集成恵那郡：257]
- ネリタイ　ハヨー　ネリタイ　[中津：69]
- ねります　句　寝ます。「ねる」をラ行四段に活用させるのは面白い。[集成恵那郡：270]
- みりい　見なさい　恵ナ○　[釜戸：21]

[終止形]（例文の下線は本稿筆者による。以下同じ。）

- りんな　りるな，なさるな　じろじろ見りんな，そんなところへ行きんな　禁止 [恵那：16]
- いらる　居る（日和田[5]）　[飛騨の方言：35]

[命令形]

- みれ　動　見なさい。四段活用　[集成恵那郡：275]
- みれ　見よ。「こいつを〜」（高山市）　[飛騨の方言：359]
- ねれ　寝よ。眠れ（高山市）　[飛騨のことば：284]
- ねれ　動　寝よ。「寝る」の四段活用がいよいよ明白だ。　[集成恵那郡：：270]
- ねれ　ねよ　[東濃：32]
- オシーノミニ　ズーキオ　イレレヨ（味噌汁のみにずいきを入れなさい）[中津：46]
- コノ　アタリニャー　ヘンビガ　イルデ　キーツケレヨ　[中津：80]
- やめれ　止めろ（近頃子供の間で）　[飛騨の方言：378]
- おきれ　句　起きよ。起きなさい。　[集成揖斐郡：156]

命令形については，飛騨地方や西濃地方にも見られるが，五段動詞化は基本的に東濃地方の特徴と見ることができる。「見ロー」については，今回の資料からは得られなかったが，喜多川（1976：266-267）には報告されている。

現在の状況についてより深く知るために，2011年11月に恵那市明智町ならびに中津川市福岡町でおこなった「見る」の活用形に関する調査の結果を示す[6]。なお，仮定形は一段動詞の活用と同じのため省略し，代わりに学校文法で未然形接続とされる意志の助動詞「う・よう」を付加した形式（意向形）を調査した。記号は，○＝ふつうに使う，△＝聞いたことはあるがあまり使わないことを表す。

	恵那市明智町	中津川市福岡町
未然形（否定形）ミラン	○	○
連用形（タ形）　ミリタ	○	△
終止形　ミリル	○	△
命令形　ミレ	○	○
意向形　ミロー	○	△

動詞「見る」に関しては，現恵那市と現中津川市を合わせた旧恵那郡で広くラ行五段化現象が生じていると見ることができる。しかしながら，福岡町でよく使われるのは，否定形の「ミラン」と命令形の「ミレ」に限定され，同じ未然形であっても「ミロー」は少ない。

5 日和田（ひわだ）：旧大野郡高根村日和田地区（現高山市）。長野県境にある。
6 明智町話者は昭和4年生まれの男性であり，福岡町話者は昭和５年生まれの男性である。いずれも，同地で生まれ学校で離れた数年間以外は同地居住である。

問題は終止形の「ミリル」である。喜多川 (1976:275) には，これを「行キル類」として「親愛語的性格の強い」敬語表現と捉える記述がある。つまり，上に挙げた恵那資料の記述「じろじろ見りんな」は，共通語の「〜しなさい」のように，尊敬の助動詞を後接させた形ということになる。今回，明智方言話者から，「今日は，相撲を見りる。」や「きょうはこの服を着りる。」のような，主語が話し手と想定される場合であっても，「あなたは何を見りるか。」や「あなたは何を着りますか。」[7] のように，主語が聞き手と明示されるであっても，いずれも用いられることが確認できた。「親愛的性格」が丁寧語のような場に対する配慮であるとすれば，共通語でも「私が行きます。」と「私」を主語にして丁寧語が用いられるように，主語が限定される性質のものではない。ここから活用体系に一種の補充がおこなわれ擬似的に整えられた体系が成立したと考えるのが順当であろう[8]。

このように，明智町ではもっともラ行五段化がおこりにくい終止形も含め，一段動詞に関し，見かけ上，ラ行五段化した体系を見ることができる。

では，一段動詞すべてが同様の体系的移行をしているのか。実際にはそうではない。明智町では，「着る」について，すべての活用形にラ行一段化が観察されたが，「教える」では，終止形「*教エリル」と意向形の「*教エロー」が使われない。福岡町でも同様の結果が得られた。また，一段動詞と似た活用をするカ変でも，明智町では「来ラン」が〇，福岡町では×（使用しない）と回答された。つまり，体系があって形式が産出されるということではなく，やはり，個別の語形が集められたものが体系をなしていると言わざるを得ない[9]。

４．サ変動詞の一段化

学校文法で動詞は，五段動詞，上一段動詞，下一段動詞，カ変動詞，サ変動詞の５種類の活用型に分類されるが，実際に，現代語においては上一段動詞と下一段動詞の区別は，五段動詞のカ行，サ行などの行と同様，段の下位区分であり現代語では区別する必要はなく，さらに，カ変とサ変も，仮定形にレバが付くなど一例をとってもわかるように一段動詞の類であることは自明である。カ変・サ変が一般の一段動詞と異なるのは語幹母音（学校文法の一段動詞で言えば活用語尾の第一音節）自体が変化することであるが，活用の単純化という流れで言えば，これも変化しない同一語幹へと（語幹とは本来的に不変化の部分のことであることからすれば当然であるが）統合される現象が，地域的には見られる(「来る」については，国立国語研究所 (1991) 第69図，第83図などを参照)。

当地方では，カ変動詞について一段動詞化は進んでおらず，おもにサ変動詞の一段動詞化が見られる。国立国語研究所 (1991) 第70図では，「する」が西濃地方および飛騨地方東部で「シル」として報告されるほか，県内広く「セル」の形で報告されている。また，第84図では，「しない」が西濃地方２地点（徳山村および揖斐川町）で「シン」が報告されているほかは，県内全域で「セン」となっている。

県内各地の方言集を見てみると，次のような記述が得られる。

---

7 ただし，「見りますか。」「着りますか。」は目上に対して用いると付記されていた。

8 この点については，広島大学小西いずみさんからのご教授をいただいた。

9 なお，動詞ではないが，次のような「きりもの（着り物)」に関する報告も多く見られた。

・きりもん 着物 [芥見郷土誌：413]　　・きりもん 着物 [川島町史：1294]
・きりもの　きりもん　着衣 [北方町史：934]　・きりもん　着物 [真正町史：1037]
・きりもん　きもの　着物 [大野町史：1313]　　・きりもの　着物 [平田町史：1198]

「着り物」については，『日本国語大辞典』によれば，日葡辞書にqirimonoとして見られ『かた言』に「外家（げげ）の衣類を，きものといふべきを，きりものといふこと然るべからず，きる物とはいふべき歟」とある語とある。『大辞泉』は関西方言とするが，岩手や山形に見られ，愛知県以西では広く見られる形式である。これは，「着る」が五段動詞化した連用形「着り」に由来するものでなく，「着るもの」が変化した語形であるか，少なくとも語彙として岐阜県内に伝来したものと考えなければならない。

［未然形］

- …しん　…しない。否定の意。　[飛騨の方言：176]
- しんかい　しませんか　[平田町史：1203]
- …せん　…しない。否定の意。　[飛騨の方言：194]
- セン　しない　[新修上石津町史：737]
- せん　やらせん（否定）　[養老町史：837]
- モーセン　もうやらない　[上石津町史：919]
- ほっこりせん　病気がすっきりしない　[根尾村史：790]
- せんか　しないのか　[養老町史：837]
- せんと　〜しないで　[養老町史：837]
- センカ　しないか　[新修上石津町史：737]
- セナンダ　せなかった　[上石津町史：917]
- …せんか　しようか。◎北，土，岩　[飛騨の方言：194]
- せんならん　しなければならない　馬。◎岩　[飛騨の方言：195]
- チンクラ　セン。　片足とびしない？　子供たちの会話　[中津：23]
- しなかった　1 シナンダ，2 セナンダ　オンシャー　ハタシゴト　シナンダカヨー。ターケヤナー。　お前は畑仕事しなかったのか。ばかだなあ／　キンニョウ　ゲキニ　オンシャー　デルコト　セナンダカヨ　きのう劇にお前は出ることをしなかったのかい　[中津：39]
- マット　イッショーケンメー　ベンキョーオ　セニャ　アカンゾ　もっと一生懸命に勉強しなければいけませんよ　[中津：89]

否定形については，各所で併用されている様相が得られており，国立国語研究所（1991）第84図で描かれているよりも併用が一般的であることがわかる。

否定形以外の未然形については，次のような形式が得られた。「セレル」は「*セラレル」のいわゆるら抜きことばである。

- せれる　出来る。される。なさる。　益，萩。　[飛騨の方言：194]

なお，今回の資料ではいずれも拾われていないが，若年層でもよく聞かれる方言に，「〜しないで」を意味する「〜シズニ」がある。これは，強い共通語意識をもって使われる語形であるが，やはり，根底には「シ-」が（少なくとも否定については）語幹であるという意識があるものと推察される。

［連用形］

- モウハイ　ソンナ　コト　シャーヘンデ　ユルイテ　もうその様な事はしないから許して下さい　[中津：94]
- せやせん〔句〕しやしない。しない。「そんなことせやせん。」　しやせん，しやへん，せやへん，も同義。　[多治見：80]
- せた　句　した。　[集成恵那郡：263]
- せよ　動　3 センサイ，4 シンサイ　カッテニ　ハナシオ　シンサイ。ワタシャ　シラン　コッチャデー。　勝手に話しをしなさい。私は知らないことだから　子供が相手に怒って　[中津：50]

連用形が「セ-」となる例は，主に東濃地方資料から得られた。ただし，「しなさい」「しやしない」に該当する語形で多く「セ-」となるが，「した」や「して」が「セタ」「セテ」となるのは，報告がないか，極めてまれである。

[終止形]

- しる　　する。行為を言う。古，河，宮川，上。　[飛騨の方言：175]
- しる　　する〈行うこと〉　[垂井町史：841]
- しる　　する　[養老町史：837]
- ……しる　　……する　　子守をしる・炊事の準備をしる　[垂井町史：41]
- シル　する。　「さぶけんしるで，今日は風呂おくわ」「ふんなことせーへんもん」　「 えぁーてにもしーへんわぇーなん」　　活用：セン・シン，セーヘン・シーヘン，シマス，シル，シヨ・シヨー，シヤ，シタ　[大垣：143]
- しる（仕事をしる）　　する(行う)　[川島町史：1299]
- しる　　する（行うこと）　[赤坂町史：532]
- しる　　何々する　[池田町史：903]
- しる〔動〕「する」。　・〔会議を〕ここでシル(開く)か。・〔買い物を〕これシル(買う)。　(坂本では「せる」。)　[坂内村誌：890]
- シル　　する　[坂内村誌(川上)：911]
- しる　　する（行うこと）　[垂井町史：841]
- しる　　する　[養老町史：837]
- しる〔動〕　する。「手伝をしる。」　[多治見：78]
- へたしると　もしかすると。ややもすると。運が悪いと　小　[飛騨の方言：329]
- あんばいしる　共（ぐあいよくする）　[藤橋村史：176]
- しんまいしる　共（手入れする）　[藤橋村史：180]
- ぞんぞがしる　横　杉　ぞぞけだつ　（ぞっとする）　[藤橋村史：180]
- まわししる　共　（用意する）　[藤橋村史：185]
- ぞうぞがしる〔動〕　　ぞっとする，さむけがする。　「ぞぞがしる」とも。　〔背筋に寒気が走るような〕いやな気分になる。　[坂内村誌：891]
- ひょっとしる-と〔副〕　もしかすると，思いがけないことだけど。　[坂内村誌：894]
- シチョウラッパイな事しるとショビツッテッテ蔵にホリコムゾ　[揖斐川町史：21]
- オンシそんなチョゥラカイタモンで何シルイ　[揖斐川町史：26]
- しる　　何々する　[北方町史：936]
- あたんしる　逆，反報をすること　[本巣町史：1293]
- そうーしるとさいが　　そうすると　[川島町史：1300]
- しんな　　するな。制止・禁止の命令形　しんあい。　[飛騨の方言：195]
- ソンナ　モゴイ　コト　シンナ　そんなかわいそうな「むごい」ことするな　目下や同等に。たしなめて　[中津：26]
- コイツァー　ゴージョーナ　ヤッチャデ　シルヤナイッテ　コトオ　イジンナッテ　ヤルニ　この子は強情な奴だからするじゃないっていうことをわざと（意地になって）するんですよ　身内の者のことを。同等の他人に　[中津：99]

- セル　する。(廃)　大正期には聞かれなかった。　[大垣：143]
- せる　する　○　[釜戸：11]
- せる　　する　なす　行う　[土岐：79]
- ひょっとせると　事によると　[輪之内町史：750]
- どーせる　　どうする　馬　[飛騨の方言：250]
- ……せる　　する（例）　何々せる　[北方町史：936]

- せんな　共（するな）　[藤橋村史：180]
- そうせると　そうすると　[川島町史：1300]
- せるな　するな　[笠松町史：542]
- せるな　するな　[本巣町史：1305]
- せるな　するな　[平田町史：1204]
- せるな　するな　[厚見郷土史：301]
- せんな　(するな)　[藤橋村史：180]
- せんなよ。　するなよ。牽制・制止する　[飛騨の方言：195]
- せんない　せんなよ。　馬　[飛騨の方言：195]

「シル」も「セル」も，特に西濃方言資料から多く得られたが，実際に県内の広い地域で観察されている。

[仮定形]

- そうせや〔句〕そうすれば。「そうせやこれから行こう。」そうしゃ，も同義。[多治見：80]

[命令形]

- コンナノ　アヤスイ　モンダイヤ。マチト　ムッカシーノニ　セヨヨ　こんなのたやすい問題だ。もっとむつかしいのにせよ　[中津：55]

語幹が，「セ-」から「シ-」に移りつつあるという現象については，小林隆 (2004：568-573) が全国の動向を歴史的観点から分析している。それによると，おおよそ近畿方言など西日本で「セ-」系の活用（否定形のセン，意志形のショー（＜セウ），命令形のセーなど）が多く，東京方言など東日本で「シ-」系の活用（否定形のシナイ，命令形の「シロ」など）が多いとする。小林 (2004：571-572) によれば，やはり，すべての活用形で語幹が統合した地点は，「シ-」系で福島や新潟など 3 地点のみであり，不完全な統合に留まっている。

岐阜では，おおよそ古典の時代から続く否定形・命令形を中心とした西日本的な「セ-」系活用を受け継ぎ終止形の「セル」などを独自に発展させながらながら，近年では，東日本に多い「シ-」系への統合に与するように，少なくとも否定形で強く，また，命令および（「セ-」→「シ-」という意味で）仮定，連用形でも，変化が進行中であると見ることができるであろう。

なお，少数のみ報告された語形にも着目すると，サ変動詞も一段動詞の一種であることから，ラ行五段化現象を見ることができる。

- アノコワ　チョットモ　シゴトヲ　セラスト　ナマクラダ　あの子は一寸も仕事をしなくてなまけ者だ　[中津：65]
- せよ　動　5 ヤレ，6 セランショ　ボタノ　クサカリデモ　セランショヨ。アツー　ナランウチニ　土堤の草刈りでもしなさいよ。暑くならないうちに　[中津：50]
- せよ　動　1 セヨ，2 シリーヨ　アンター　ソージ　シリーヨ。イラン　ハナシオ　ショーラズニ　あんた　掃除しなさい。いらぬ話をしていないで　目下を叱るように [中津：50]
- ツクエヲ　ヅルトキニ　カビンヲ　コワサンヨーニ　セリィーヤ　机を移すときに花びんをこわさない様にしなさいよ　目下，同等　[中津：14]
- しれ　せよ。行動を促すことば。（大野，高山）　[飛騨の方言：175]
- せれ　せよ。動詞の命令形（中以南）　[飛騨の方言：194]

・せれ　　せよ　なされ　　[東濃：22]

「セラスト」は否定接続「〜ないで」に相当する「〜スト」が含まれているが，その接続はラ行五段化した未然形「セラ〜」である。

５．方言から見た活用体系とは

結局，活用体系とは何か。これを考えるに際して，行の交替現象について，いくつか見ておきたい[10]。

岐阜県内の方言に関しては，次のような五段活用行の交替が見られる。

[カ行 － サ行の交替]

・ほどく　１ホドス　フルイ　キモノ　ホドシテ　ナニ　シトラッセルンヤ　古い着物ほどして何をしていますの　[中津：81]

・コハク　毀ス　[山縣郡志：344]

・コワク　(壊す。砕く)　[新修関市史：891]

「ほどす」が方言形であり，カ行イ音便からサ行五段動詞が逆成された例である。一方，「こわく」は，サ行動詞からイ音便を介してカ行五段動詞が逆成された例である。後者は，岐阜市近辺の壮年層以上でたまに聞かれ「こわく」のほか，「街こわき」のような連用形での使用も確認されている。

このほかにも，方言語形のみが報告される「（ぞんざいに）修理する」という意味の「ソソクウ」「ソソクル」が，藤橋村，大野町，輪之内町，武儀町，可児町で報告されている。これらは，促音便形「-ッテ」を介して相通ずる。

このような行の交替が起きるという現象そのものは，主として連用形を介して類推される作用の強さが根底にあって生じるものと考えられる。

さて，活用はどのようにして体系を為すか。ここに立ち戻らなければならない。

古代から，日本語では四段動詞と一段動詞が相互に交替する現象は知られていた（川端1982など）。もちろん，意味が異なる別語と取り違えたり，機能的に異なる別形態と混同したりは，その都度問題となりつつも，個別の語形は厳密に演繹的に確定される活用体系によるのではなく，言い習わされた形式の帰納的積み上げでしかない側面も垣間見られる。同様に，方言においても，教育の成果として活用表ありきで活用がなされるわけではない。その都度その都度文の中で用いられた形の総体が活用体系として認識されているにすぎない面も強くある。それが，「載シテ」など特別な連用形であったり，カ行とサ行の交替であったりもする。もちろん，ラ行一段化のような類推による体系の移行も考えなければならないが，これも部分的にしか生じていなかったり，逆に長い動詞のように活用体系意識によって生成される部分では共通語と同形であったりすることから考えれば，そのルールの適応範囲は地域によって違うと言えども，基本的に「方言的な活用体系」は，個々の部分的活用の寄せ集めに過ぎないと，現段階では考える。

今後，個別語形だけでなく，この体系性に着目した方言における活用の調査に基づいた考察がなされなければならない。

【付記】

本考察は，2011年度科学研究費基盤研究（C）「岐阜県方言データベース構築ならびに総合記述に関する研究」（代表：山田敏弘，課題番号23520549）および国立国語研究所共同研究プロジェクト

10 音声的な交替と考えられるカ行とガ行の交替については，今回省略する。

「方言の形成過程解明のための全国方言調査」（代表：大西拓一郎）の成果の一部である。両研究でお世話になった各地話者については，個人情報保護の観点からお名前を載せることは控えるが，ここで調査協力に対し厚く御礼申し上げます。

【引用資料】

市町村史（紙幅の都合上，発行所・発行者は省略し出版年と巻名のあるものは巻名のみを記す）

［西濃地区］　『大垣市史』(1930)，『赤坂町史』(1953)，『大野町史　通史編』(1985)，『輪之内町史』(1981)，『南濃町史　通史編』(1982)，『平田町史下巻』(1964)，『坂内村誌　民俗編』(1988)，『池田町史　通史編』(1988)，『藤橋村史　下巻』(1982)，『揖斐川町史　通史編』(1971)，『関ヶ原町史　通史編別巻』(1993)，『垂井町史　通史編』(1969)，『上石津町史　通史編』(1979)，『新修　上石津町史』(2004)，『養老町史　通史編　下巻』(1988)

［岐阜地区］　『岐阜市史』(1928)，『芥見郷土誌』(1961)，『厚見郷土史』(1987)，『各務原市史　考古・民俗編　民俗』(1985)，『川島町史　通史編』(1982)，『笠松町史』(1957)，『本巣町史　通史編』(1975)，『根尾村史　通史編』(1980)，『真正町史　通史編』(1975)，『改訂　北方町史』(1932)

［中濃地区］　『可児町史　通史編』(1980)，『武儀町史』(1992)，『新修　関市史　民俗編』(1996)

［東濃地区］　『岩村町史』(1961)

個別方言集（［　］内は本文中で用いた略号）

『岐阜県方言集成 全』瀬戸重次郎 (1934) ［集成］　（郡名を併せ記した）

『山縣郡志』山縣郡教育會（1918）［山縣］

『美濃大垣方言事典』杉崎好洋・植川千代 (2002)　美濃民俗文化の会　［大垣］

『東濃方言集』恵那郡教育會（1903）［東濃］

『大井を中心とする方言の研究』岐阜県恵那郡大井尋常高等小学校 (1933) ［大井］

『中津川を中心とした恵那ことばの研究Ⅰ』 岐阜県立中津高等学校郷土研究部言語班（1956）［中津］

『ふるさとの方言』釜戸寿大学編 (1979) ［釜戸］

『多治見を中心とした土岐方言集』多治見市教育研究所 (1957) ［土岐］

『多治見のことば』多治見ことば編集委員会 (1974) ［多治見］

『飛騨のことば』土田吉左衛門 (1959)　濃飛民俗の会　［飛騨のことば］

『飛騨の方言』岩島周一 (1996)　高山市民時報社　［飛騨の方言］

【参考文献】（本文中に引用した市郡町村史は除く）

川端善明 (1982)「動詞活用の史的展開」『講座 日本語学 2　文法史』明治書院

喜多川裕 (1976)「東美濃方言　第 4 節　文法」奥村三雄編『岐阜県方言の研究』大衆書房

小林　隆 (2004)『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房

都竹通年雄 (1941)「飛騨萩原方言における動詞と形容詞の活用」『方言研究』4，日本方言学会（『都竹通年雄著作集第 2 巻文法研究編』(ひつじ書房：1996) に再収）

山田敏弘 (2007)「日本語における自他の有対性と他動性 － 岐阜県方言の自動詞『おぼわる』『鍛わる』『のさる』『どかる』を通して－」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨編『他動性の通言語的研究』くろしお出版